

浅見哲夫さんを偲んで

浅見哲夫氏への思い出



岡本 浩一

okamotok@gol.com

「岡本さん、何か癌なんか消えてしまったようだよ。どこも悪くないしね」。賀状を頂いた後の電話でのやりとりで、彼はそう言って笑っていた。前年 10 月に心臓を患いペースメーカー挿入手術をした私の事をかえって気遣ってくれた。その彼がたった 5 日間の入院の後、3 月 11 日突然亡くなられたとの知らせを奥様から受け言葉を失った。無念である。

彼とは、独身時代からの実に長いお付き合いである。思えば私が職員番号 113 で、財団法人日本原子力研究所へ入所した時、浅見さんは既に先着の職員であった。

原礼之助、夏目晴男、大野善久氏等々の多才な人達が既に先任として活躍されていた。当時、田無の原子核研究所が核研とよばれていたのに呼応して原研は力研とよばれていた時代である。早速大野善久氏等と第一基礎研究部（部長：杉本朝雄先生）に入り、当時駒場東大前にあった旧熊谷寛夫先生の研究室を借り、研究室作りの仕事にかかった。昼休みには生来の運動音痴である私の下手なキャッチボールに、東工大から来た浅見氏が付き合ってくれたのも、力研時代の楽しい思い出のひとつである。

私自身の第 1 回原子力留学生としての Norway からの帰国後、浅見さんと共に大野善久氏のもと JAERI 中性子クリスタルモノクロメータを三菱電機の製作で完成させたが、これは大変意義のあることで、その後の日本の中性子解析装置の先駆けとなったと思う。その後、OECD、IAEA と 20 年余におよぶ海外生活の間、本の好きな私のために途切れることなく本を送ってくださったりしていつも側に居るように助けてくれたのが浅見さんだった。特に OECD から帰国した後すぐに原研を辞め IAEA に移った時には、当時原子炉技術課に移っていた彼にはずいぶんと心配をかけてしまった。以後海外生活の長かった私は、仕事の面での彼とのお付き合いはあまりなかったため彼との思い出は専らプライベートな面が多い。

1990 年 IAEA を定年退職して帰国した私は、OB として浅見さんと共に再び核データ活動に参加した。浅見氏は原子核反応の断面積の評価に活動したが、そのひたむきな評価活動は JENDL の完成に大いに寄与したと思われる。

浅見さんは若い時から趣味の多い人だった。特に山登りは玄人はだしで、海外生活中の私にこれも玄人はだしの写真をよく送ってくれた。仕事の第一線を退いてからの彼の趣味はなんといても絵画であろう。千葉の日洋会に属し桜井先生の指導のもと毎年上野公園で開かれる日洋展に出品し入選し、私も何度か作品を見せていただいたものだ。特に私が好きだった作品は逆光を利用して描いた朝の魚市場の絵である。近くもう一度見せていただくことになっていたのだが...

浅見さんの絵、私の趣味である城の写真撮影、この二つを満たすためのヨーロッパの古城巡りの旅を 1992 年以来何度か二人でした。ある時は 1 日千キロ以上もの行程を車で走ったこともあった。こんな時も山男浅見さんらしく常に山の道具を持参してコーヒーを沸かしてくれたのも懐かしい思い出である。もっとも浅見さんは私の城の歴史、特にテンプル騎士団についての熱烈な関心よりは当時もっとも熱心だった画の方の趣味が強く、私が城を回っている間、付近のどぶ川（と私にはうつったのだが..）の方ばかり画題の興味からかよそ見をしているのでひやかしたことも度々であった。あまりお酒の飲めない浅見さんをスコットランドではお土産にシングルモルトウイスキーを自ら購入するほどの酒好きにしてしまったのは、奥様に申し訳なく思っている。97 年には今ベストセラーとなっている「ダ・ヴィンチ・コード」の最後の場面に出てくるエジンバラ近郊のロスリンチャペルを訪れ、私は内部の彫刻を撮り、彼は外に咲いていたスコットランド国花のあざみの花をスケッチしていた。当時「ダ・ヴィンチ・コード」がこんなにも有名になるとは思わなかったので私は浅見さん抜きでもう一度昨年再訪問し彼に報告したところ「ダ・ヴィンチ・コード」をもちろん読んでいた彼も又興味をそそられたようで、今度是非一緒に行きましょうと大いに盛り上がったものだったが、それも叶わぬこととなってしまった。

2003 年頃からは私の城 *crazy* にいささか辟易されて彼の興味はイタリアに向かっていた。彼ののめりこみようは一樣でなく、イタリア語のマスターから始まっているのが何事も中途半端にしない浅見さんらしい。

彼は又、物を書くことにもすばらしい才能を示している。とくに最近頂いた樋口一葉について書かれた「一葉ぐるい」なる文章は彼が樋口一葉にのめりこんだ気持ちが随所にみられる。彼は言っている。世にいわれる薄幸の人一葉は「薄幸」どころか実に幸運な人生を送った人であると。彼女の 24 年の短い生涯で次々と起こった世間一般から言えば不幸な出来事は彼女の才能により見事に作品に結実しているのであり、これらの不幸がなければ名作の数々は生まれなかったと。さらに 24 歳で夭折したからこその一葉作品で、あれ以上はもう要らないという井上ひさし氏に共感をしめしているのである。

このマイナスをプラス思考にもっていこうとする生き方に私は晩年の浅見さんの生き方をみる思いがするのである。実は彼は医者からは末期癌との宣告を受けていた。私ならこの時点で参ってしまうだろう。しかし彼は必ず良くなるとの信念のもと希望をけし捨てずに最後まで生き抜いた。冒頭に述べたように実に明るく最後の日々を過ごされ

ていたのである。

思えば浅見さんの懇切丁寧な案内で、東大本郷付近の一葉ゆかりの場所を丹念に探索したのが昨日のようである。

私の趣味の城廻りや新たに妖精についての探索などにも再び興味を示してくれ、又一緒に車での旅行を再開しようと楽しみにしてくださっていたのに残念である。

何か支えてくれる力がふっと無くなった感じのする今日この頃の私です。

心からご冥福をお祈りいたします。

2005/05/04 記

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

浅見哲夫さんを悼む（ある思い出）

五十嵐 信一

sigrs@palette.plala.or.jp

3月12日の朝、e-mailを開いた私は目を疑った。浅見哲夫さんが亡くなったと言う知らせであった。発信者が中川庸雄氏でなかったら悪戯メールと思ったかも知れない。最近悪戯メールが多く、迷惑していたからである。しかし、メールが核データセンターからで、中川氏であっては疑いようもなく、直ちに核データセンターに電話を入れた。ところが、誰も出てこない！番号を変えてみたが、やはり誰も出てこない。皆サボっているのかと思ったが、ふとカレンダーを見て、土曜日であることに気がついた。私自身がかかなりの衝撃を受けて動揺し、冷静さを欠いていたのである。

まさに信じられない知らせであった。浅見さんは常日頃健康には気を使っておられ、好きだった煙草を止め、摂生に努めていられたからである。2003年の11月に阿漕が浦クラブで原研の旧物理部の同窓会があった。思い返せばその時お会いしたのが最後になってしまった。趣味の絵やデジカメ、旅行などの話をされて、充実したシニアの生活を楽しんでおられたようだった。同窓会の帰りには、岡本浩一さんと中井洋太さんと共に勝田駅まで車に乗せていただいた。浅見さんご自身は何処かのお寺にでも寄って帰る予定とか言っておられた。車中では種々の思い出話をし、再会を喜び合った。次は何時会えるかなどと言って別れたのだが、こんなに早く逝かれてしまうとは想像もできなかった。年齢だって私より1歳上であるだけであるのに！

浅見さんは原研が設立した当時の入所で、1桁か2桁の早い職員番号を持っておられた。シグマ委員会が発足した1963年頃には、核物理第1研究室に所属され、研究用原子炉

JRR-2 に設置したクリスタルモノクロメータを使った希土類元素の中性子共鳴パラメータの測定などを専門にされていた。その関係で、シグマ委員会の発足当時から委員として参加され、共鳴パラメータを収集し整備するグループで活躍された。その後暫くは研究炉管理部に移られ、シグマ委員会からも離れられていた時期があったように記憶している。私はこの時期の浅見さんのご活躍についてはあまり知らないのだが、1974 年頃からは核データセンター（当時は未だ核データ研究室であったと思う）に加われ、以後は一貫して核データの研究活動に貢献されたのである。

JENDL に関する研究活動が組織だって始まったのが 1972 年頃であったから、浅見さんのご加入は非常に力強く、頼もしい限りであったことを覚えている。事実、JENDL-1 では編集グループの一員として貢献され、その後の JENDL-2, -3 では計画立案の当初から中心的役割を担われた。JENDL-2 の核データ評価では Si-28、29、30、Cr-50、52、53、54、と天然元素 Co-59、Pb-204、206、207、208、と U-234 などを担当され、JENDL-2 全体の編集にも寄与された。1977 年には原子炉構造材に関する核データを検討するための OECD/NEA 主催の専門家会議に出席されて、これらの成果の一部を発表された。JENDL-2 が 1982 年に公開され、引き続き JENDL-3 の作業に入った時には核融合炉用の核データも含めた多数の核種についての評価研究に携わられた。

こうした研究活動の他に、核データセンターにはシグマ委員会の事務局としての役割がある。特に、専門部会や常置グループと言った研究作業を実施する会合が多数あるために、その会議室の予約や資料の準備などには専門のスタッフが必要である。言ってみれば、縁の下の力持ち的の仕事だが、浅見さんはこの役目も担当され、補助職員を良く訓練されて遺漏のない準備をなされ、委員の皆さんに感謝されたのである。また、例年行われている核データ研究会の事務局も核データセンターの大切な役割であるが、浅見さんは 1979 年頃からこの役目も担当され、同時にプログラム委員、実行委員、更には proceedings の編集と発行にも尽力された。

核データニュースに関する浅見さんの功績で忘れてはならないことがある。それは、1975 年の JNDC ニュース 34 号から 1995 年の核データニュース 52 号（通巻 88 号）までの 20 年間、55 号に渡って編集委員を務められたことである。この間、定年を迎えられた 1988 年頃までは編集委員長も務められ、ニュースの有りようや編集の仕方について種々工夫を凝らされたのである。

核データセンター及びシグマ委員会での数々の重要な仕事をされてきた浅見さんも 1988 年 10 月には原研での定年を迎えられ、財団法人原子力データセンター（NEDAC、現在の高度情報科学技術研究機構（RIST））に移られた。しかし、先にも触れたように、核データニュースの編集委員としての貢献のほかに、核データ評価の仕事は引き続き担当され、特に、核融合炉用の核データ評価研究にはかなりの勢力を割いて努力されていた。私も翌年の 10 月で定年になり、浅見さんと同様に NEDAC に移り、机を並べることになった。浅見さんも私も核データセンターから JENDL-3 のための仕事を引き受けてい

た。浅見さんは NEDAC にも幾多の貢献をされていたが、契約上のこともあり、1992 年頃に NEDAC を辞められて、データ工学に移られた。私も 1994 年 3 月で NEDAC を退職し、自宅での生活に入った。従って、東海村でのお付き合いはここで終わったわけである。

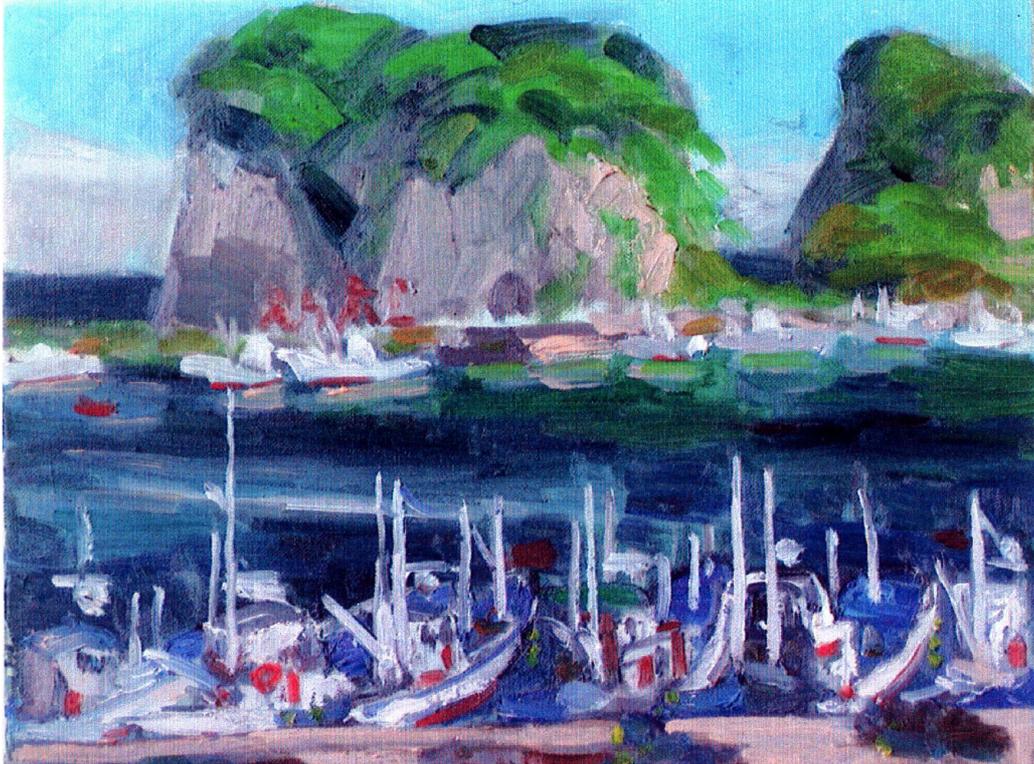
さて、ここまでは仕事に関わる浅見さんの思い出を述べてきたが、以後は多少私事になる。実は、私の東海村での生活は単身赴任で、最初から終わりまで独身寮を利用していった。浅見さんも柏市にご自宅を持たれてからは東海村では独身寮を利用されていた。そんな関係で、週末には車に乗せていただくことが何回かあって、大変感謝している。そんな中での会話や原研時代のお付き合いで知った浅見さんのお人柄に触れてみたい。

初めにも一寸触れたように、浅見さんは大変趣味の豊富な方であった。NEDAC 時代に気がついたのだが、浅見さんは大変な読書家で、National Geographic、Time、日経サイエンスなどの科学記事を探してきては読んでおられた。特に、伝記的な記事には興味を持たれていたようで、核データニュース No.75 に掲載された「Alvarez の自叙伝に想う」はそうした多数の読書の中から取り出されたものであったのだと思う。

芸術の面では、絵の腕前は大層なもので、毎年、年賀状にはご自分で描かれ素晴らしい油絵の写真を載せられていた。展覧会にも屢々出展されていたようだ。若い頃には登山も趣味にしておられたようで、何かの折りに、気圧の低い山頂での飯ごう炊飯の火加減について事細かに語られていた事を思い出す。登山もそうであるが、サッカーや野球のようなスポーツにも興味を持たれていて、特にサッカーはよくプレーをされていたようだし、朝の出勤前には広場に出てボールを蹴っておられたようだ。通夜の晩に拝見した遺影はそんな一時のスナップでもあったのか、T シャツ姿で微笑まれた、懐かしく、穏やかな眼差しであった。

若い頃の浅見さんは、また、大変なヘビースモーカーでもあった。よくパイプ煙草を吸っておられた。酒の方は好きでなく、酒の値上げは構わないが、煙草の値上げは困ると言って皆を苦笑させていた。先にも一寸触れたが、その浅見さんが、原研を辞める少し前から煙草をすっかり止められたのには驚いた。嫌煙運動が強くなったのと、ご自分の健康に気を付けたと言っておられた。健康のことでは、コレステロール値を大変気にしておられた。何でも、独身寮での朝食にバターをたっぷり付けたパンが原因で、コレステロール値が高くなって、医者から注意されたのだそうだ。それで、この朝食の習慣は止めることにしたと言っていた。好物を止めるその意志の固さには敬服したことを思い出す。

この様に健康には良く注意されていた浅見さんが何故こんなに早く逝ってしまわれたのか、本当に残念である。仕事の面だけでなく、日常生活の面でも色々と参考になることを教えていただいたと思っている。あれやこれやを思い出し、私自身の今後の生き様に活かしたいと思っている。ご冥福をお祈りするばかりである。



浅見さんが描かれた平潟港（2003 年年賀状から）